

---

# 消えたバナナは何処へ

子子子子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

消えたバナナは何処へ

### 【Nコード】

N22330

### 【作者名】

子子子子

### 【あらすじ】

バナナはいずこへ。

ただバナナを探す。

台所に在ったバナナが無い。そうバナナがないのだ。もう一度見ても、やはりバナナが無い。

どうして無いんだ。昨日の晩に発見して以来、食べようと心に固く誓ったのに。

十七年前に、僕を産んでくれた母親に、どうしてバナナが無くなったのか聞いてみた。

「ねえ、バナナはどこにいったの」

「バナナ？電子レンジの横に置いてあったでしょーが。無いの？それより病院行くから。ほら、腰痛いって昨日言ってたでしょ。受け付け四時半までだから、急がなくちゃ。土曜日は、一時間早いのよね。お母さん帰ってくるまで晩御飯我慢しててね」

すり替えられた話は、せわしなく動き回る母親の足元で踏みつぶされてしまった。

駄目だ。バナナが食べたい。晩御飯のハンバーグよりもバナナが食べたい。でもハンバーグも食べたい。

そうだ、勤勉な父親に電話してみよう。図書館に行っているはずだ。少し震えた手で携帯電話を操作する。四回目のコール音で、電波に乗った父親の声が聞こえてきた。

「どうした？」

「ねえ、バナナはどこにいったの」

「何？バナナ？どこって机の上に無かったか？」

「無いよ。電子レンジの横にも無い」

「そうか、じゃあ誰かの胃袋の中じゃないのか？あ、父さんの胃袋の中には、ブラックコーヒーしかないからな。疑うんじゃないぞ」「誰の胃袋に招かれたんだバナナは」

「さあな。母さんじゃないのか？」

「母さんは違うらしい」

「そうか。なら父さんが帰りにバナナを買って行ってやる。それまで我慢しといてくれ」

「ああ、ただそのバナナじゃ駄目なんだ。あのバナナの行方を知りたいんだ」

父親とのやり取りは、この時代にまだ残る、電波の乱れで途切れてしまった。

父親が買ってくるバナナはいらない。でも、見たら食べたくなるだろう。

そうだ、姉に聞こう。三つ上の姉に聞こう。大学の試験前だから力リカリしている姉に聞こう。

二階に上がり、姉の部屋をノックした。

「何ー？」

「ねえ、バナナはどこにいったの」

扉を開けて、その空気に乗せて聞いた。

「はあ？バナナ？私の状況わかってる。追いつめられてるのに、呑気な質問しないで」

「こっちだって追いつめられてるよ。必死だって」

「アンタ必死の使い方軽いよ。そもそもバナナは知らない。戸棚の中に無いの？」

「無いよ。電子レンジの横にも、机の上にも無いよ」

「ああ、そうだね。試験終わったら探してあげるから、もう出ていってよ、気が散る」

諦めて扉を閉めようとした時、姉の部屋のゴミ箱の中に、フルーツの皮らしきものが見えた。

背中を向けた姉は白を切りとおして、今、笑っているに違いない。その勝ち誇った顔に、証拠を突きつけてやる。

姉の部屋のゴミ箱を漁った。

「ちよつと何してるのよ」

その音に気がついて振り向いた姉に、突きつけたものは、ポンカンの皮だった。

「アンタ何してるの？」

僕は肩を落として、姉の部屋から出た。収穫はポンカンの皮。ポンカンじゃなくあのバナナが食べたいのだ。でもポンカンに浮気しなくなった。

そうだ、妹に聞こう。二つ下で、誰にでも優しいあの妹に聞こう。親身になってくれるはずだ。

姉の部屋の隣の部屋をノックする。

「んー？」

扉を開けると、ベッドに寝っ転がって、背伸びした女性ファッション誌を読んでいる妹が、目だけこちらに向けてきた。

「ねえ、バナナはどこにいったの？」

「バナナ…？知らないよー」

「電子レンジの横にも、机の上にも、戸棚の中にも無いんだ」

「うーん。じゃあ無いんじゃないの？」

「無い」

「そう、元から無かったんじゃないの？」

「あれはバナナじゃなかったの」

「いや、バナナだったかもわからないけど、そのバナナは無かったかのかも知らない」

「なるほど、バナナは無かったのか」

「そう、バナナは無かったの」

「あそこにあつたバナナは無かったのか」

「あそこにあつたバナナは無かったの」

妹は、ファッション誌と僕を交互に見ながら答えてくれた。僕は部屋を後にした。

「バナナは無かったのか」

玄関の扉が開いた。母親と父親と一緒に帰ってきたらしい。もうそんな時間なのか。

二人が階段から下りてくる僕を見て同時に声をかけた。

「ほらバナナ買ってきたぞ」

二人とも一房ずつバナナを持っている。  
あのバナナじゃないけど、バナナはここにある。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2233o/>

---

消えたバナナは何処へ

2010年10月10日04時33分発行